
僕と夢見と召喚獣

ビジェット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と夢見と召喚獣

【Nコード】

N5837U

【作者名】

ビジェット

【あらすじ】

ここには一人の巫女がいた。

ブラコン少女“吉井 千秋”とその兄“吉井 明久”の送る学園生活！

千「フツ、私、薬の調合も得意なんですよ？」

千秋の化学と明久の歴史、Fクラスの奴らと力を合わせて上クラスをやぶれるのか！

この話の明久はBクラス並の学力があります。

そんな明久は嫌だという方は戻ってください。
それでもよい方はよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

初の投稿です。

駄文ですが読んでくれるとうれしいです。

ブログ

？「千秋急いで！ 本当に遅刻しちゃうよ！」

？「待つて下さいアキ兄！」

桜の花が舞う中、私、吉井千秋とアキ兄こと吉井明久は私達が通う文月学園に向かって全力疾走していました。

千「はあ…はあ…アキ兄…先に…行ってください…」

明「何言ってるの！ ほら、息整えて…もう遅刻決定だし、歩いて行こう」

そう言うと、アキ兄は私の荷物の一つを持って一緒に歩いてくれました。

千「ごめんなさい、アキ兄…」

明「いいんだよ別に」

アキ兄はやっぱり優しいです。

アキ兄は私の双子の兄で、私と一緒に文月学園に通っています。

昔は勉強が全くとっていい程でなかったアキ兄ですが、今はBクラス並の学力があるんですよ？

明「それにしても、すごい荷物だね？ こんなのも一体何に使うの？」

千「それですか？ それはですね——」

？「遅いぞ！ 吉井兄妹！」

びっくりしました。話している間に学校に着いたみたいですね。
この声は——

明「あつ、おはようございます。鉄じ…西村先生」

千「おはようございます。鉄人先生」

そう、この学園の補習担当の教師にして、鉄人として恐れられている西村教諭。

何でも、冬でも半袖Ｔシャツ一枚、しかも趣味がトライアスロンだという噂……まあ、鉄人なんて呼ばれても仕方ないですね。

鉄「吉井兄、お前今、鉄人と呼ばうとしなかったか？ そして、吉井妹、俺を堂々と鉄人と呼ぶのはおまえと坂本ぐらいだぞ」

明「はは…気のせいですよ」

千「別に呼び方なんて好きでいいじゃないですか」

鉄「はあ…お前という奴は…まあいい。それより、普通におはようございますじゃないだろう」

はて、なんでしょう？

明「え〜っと。今日も肌が黒いですね」

千「え〜っと。今日も怒号が響きますね!」

鉄「お前達は遅刻の謝罪より、俺の肌の黒さや怒号の方が大事なのか!」

明・千「そっちでしたか」

アキ兄のも私のも違ったみたいですね。

鉄「まったく、お前等という奴は…」

千「先生、溜息吐くと幸せが逃げていきますよ?」

鉄「おまえが吐かせているんだろうが!」

むう〜私のどこにそんなところがあるんですか?

鉄「それより、ほれ、お前等で最後だ」

そう言っただけそれぞれの名前の書いてある封筒を渡してきます。

鉄「この中に今年のお前達のクラスが書かれている」

まあ、結果は分かっているんですけどね。
そう思いながら封を切る。

鉄「残念だったな、試験に出ていれば、AやBは確実にあったものを
…」

ここ文月学園は、学期末に行われる『振り分け試験』と呼ばれるテストの結果でその年のクラスが決まります。

成績の良い人はAクラス、成績の悪い人はFクラスといったように六段階で振り分けられるのですが…

私とアキ兄は振り分け試験の日にアキ兄が熱を出して、休んでしまい無得点なんです。

なので当然――

『吉井明久…… Fクラス』

『吉井千秋…… Fクラス』

――と、なってしまうわけです。

明「体調管理のできていなかった、僕の責任です」

そう言って気を落とすアキ兄……そんなに落ち込まなくても…

千「仕方ないですよ、アキ兄。それに、今更言っても結果は変わらないんですから」

明「…うん。そうだよね」

うん。やっぱりアキ兄には、笑顔でいてもらわないと。

千「じゃあ、行きましょう？ アキ兄！ 私達の新しいクラスに」

こうして、私達の二年Fクラスでの生活が始まったのでした。

くおまけく

千「そういえば、アキ兄」

明「なに？」

千「Fクラスの代表ですが……坂本君だそうですね？」

明「……………」

ブローグ（後書き）

ご意見・ご感想がありましたらよろしくおねがいします。

設定（前書き）

今回はキャラ設定です。

設定

吉井 よしい 千秋 ちあき

性別……女

所属……Fクラス

得意教科……科学・物理・数学

外見……顔は明久そっくり。髪はロング。

身長……155?

召喚獣……文月の制服に弓道で着るような防具。武器は日本刀。

腕輪……刀に冷気をまとわせる。

その他

明久の双子の妹、予知夢を見ることができ、明久によくないことが起こると分かると改変しようとする。極度のブラコン。中学の時、料理の世界大会に出場し、2つの称号を得る。
観察処分者。学力はAクラス並。

吉井 よしい 明久 あきひさ

得意教科……日本史・世界史

召喚獣……改造学ラン。武器は日本刀。

腕輪……刀に炎をまわせる。

その他

千秋の双子の兄で観察処分者。千秋からはアキ兄と呼ばれている。

中学（千秋が出た一年前）の時に料理の世界大会で 4つの称号を得た。

学力はBクラス並。

設定（後書き）

ご意見・ご感想などがありましたらよろしく願います。

第一問 Fクラス（前書き）

今日も頑張って投稿します♪

・・・・・

二日前の夢

『…廃屋？』

『なんでお前等がここに？』

『先生、卓袱台の脚が折れたんですけど…』

『すみません。保健室によつていたら遅刻してしまつて』

『せつかく二年生になったんだし、試召戦争をやってみない？』

『——FクラスはAクラスに対し『試召戦争』を仕掛けようと思
う』

第一問 Fクラス

私達はAクラスを少し覗いた後、Fクラスの教室までの道を歩いています。

今更走つても遅刻なのは変わりませんし……

明「それにしても、Aクラスは凄かったね」

千「そうですね…冷暖房完備の上、座席はリクライニングシート、黒板の代わりにプラズマディスプレイ……」

明「ドリンクバーもあったし…あれは教室じゃなくて高級ホテルのロビーだよ」

本当に何で教室にそんなお金をかけるのか分かりませんね。

そんな話をしているといつの間にかFクラスの前に来ていました。

明「……………廃屋……………?」

アキ兄が隣でそうつぶやいています。そりゃそうですね。
だって……………

腐りかけの畳

脚の折れた卓袱台

薄っぺらい座布団

おまけに、天井には蜘蛛の巣まで…

明「何で千秋がこれを持って来たのかよく分かったよ」

千「こんな状態じゃ、まともに勉強なんてできませんから」

私達のFクラス入りは確定していたので、卓袱台や綿などを持ってきたんです。

なんで設備を知っていたかは…まあ、いつか分かるでしょう。

千「それより、早く入りましょう」

アキ兄を促して私が先に入ります。

すると……

千「すみません、おそ「さっさと座れ！ うじ虫…」ほえ」

いきなりうじ虫呼ばわりされました。

グスツ……酷いです。

千「私、うじ虫なんかじゃありません」

？「なっ、明久の妹！？ 何でここに…？ お前Aクラスじゃ…」

坂本君が私を見て驚いています。そりゃそうですよね。Aクラス入り確定なんていわれてた私がいるんですもん。

それにしても……うじ虫はないですようじ虫は！

明「？ 千秋、どうしたの？」

涙目になっている私を見てアキ兄が心配そうに聞いてきます。

千「アキ兄…坂本君が私のこと、うじ虫って…」

明「総員狙え！」

『『『おおー！ー！！』』』

アキ兄の号令でFクラスの男子の皆さんが坂本君に襲い掛かります。

雄「何で会ったばかりの奴らに号令がだせるんだ！　ってゆうか、何でお前までFクラスにいるんだ！」

明「うるさい！　雄二、よくも千秋を泣かせたな！　その罪、死を持って償え！！」

『坂本テメエ、生きていられると思うなよ！』

『やっちゃんヨー。骨の髄までやっちゃんヨー！！！！』

『■ ■ ■ ○ ■ ……』

雄「誤解だー！ー！」

自業自得ですよ。坂本君…

まあ、私も気分がよくなってきたのでそろそろやめさせますか……

千「アキ兄…私なら、もう平気です」

アキ兄の袖を掴んでアキ兄を止めます。

千「アキ兄、ありがとうございます。皆さんもありがとうございました。もう、止めてあげてください…ねっ？」

そうクラスの皆さんにお礼を言いながらお願いします。

『Yes, our princess!』x44

なぜここまで息がピッタリなんですか…？

第一問 Fクラス（後書き）

短くてごめんなさい。

次も頑張ります。

バカテストは早ければ次あたりから書きたいと思います。

第二問 自己紹介（前書き）

久しぶりの投稿です。

前回の続きです。見てくれる方はどうぞ。

[illegible]

バカテスト

第一問

次の問いに答えなさい

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険だという点』

合金例……ジュラルミン^①

教師コメント

正解です。『鉄』ではダメという引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師コメント

そこは問題じゃありません。

木下秀吉の答え

合金例……銅

教師コメント

銅は合金ではありません。

第二問 自己紹介

クラスの人たちの行動に疑問を抱いていると、坂本君が話しかけてきました。

雄「それより。さっきも言ったが、なんでお前等がここにいるんだ？ お前等ならAやBは確実なはずだろ……」

ああ、そういえばまだ話してなかったですね。

千「ああ、それは――すみません、通してもらえますか」

説明しようとしていると、ヨレヨレのスーツを着た初老の男性が入ってきました。

？「それと、席に座ってもらえますか。HRを始めますので」

「……はい（ういーっす）」

返事をした後、私とアキ兄と坂本君は後ろの空いてる席に座ります。もちろん私は明兄の隣ですよ？

？「えー、皆さんおはようございます。二年Fクラス担任の……福原 慎です。一年間よろしく願いします」

黒板に何か書くこうとしていたみたいですが、どうしたのでしょうか？
チヨークがないなんてことは――

雄「そーいや、チヨークが一本も無かったな」

明「雄二、それ本当？」

雄「嘘言っても仕方ないだろ？」

あつたんですか……さすがにそこは視てませんでしたね。

福「えー、全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？ 不備がある人は申し出てください」

不備……有りすぎると思いますよ…

『先生！ 俺の座布団、綿が入ってません！』

福「我慢してください」

『先生！ 卓袱台の脚が折れたんですけど』

福「木工用ボンドが支給されていますので、後で直してください」

『先生！ 隙間風が寒いんですけど』

福「後でビニール袋とセロハンテープの申請をしておきます」

千「先生！ 自分で持ってきたのを使ってもいいですか？」

福「自分で持つてくるのは一向に構いません」

ならよかったです♪

千「アキ兄、座布団貸してください。綿入れちゃうので」

そう言つてアキ兄の座布団を受け取ります。

早く入れちゃいましょう。

千「はい、アキ兄」

明「あつ、ありがとう千秋。もう自己紹介はじまつてるよ?」

そう言われて顔をあげると前の方から自己紹介を始めていました。

?「わしは、木下 秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。一年間よろしくたのむぞい」

おや、木下君じゃないですか。彼もFクラスだったんですね。

よく、その綺麗な顔立ちから女の子の子に間違えられていて、最近では第三の性別「秀吉」なんて言われているんですよ。

?「……………土屋 康太」

また、見知った顔ですね。この口数の少ない彼は土屋君。

カメラと保健体育については右に出るものはいません。そのせいであんな渾名がついたんですが……

?「島田 美波です。海外育ちで日本語は読み書きが苦手です。でも、英語も苦手です。育ちはドイツだったので……」

島田さんもFクラスですか……

帰国子女だったから日本語が苦手で、去年も全然話せなかったのをアキ兄が気にかけていました。

美「趣味は、吉井 明久を殴——」

シュツ ↑カッターを私が投げた音

カッ ↑カッターが島田さんの卓袱台に刺さる音

島田さんの顔がみるみる青くなっています。フッフ、アキ兄を傷つける奴は私が許しません。

美「——いえ…今は探し中です」

そう言つて席に座りました。島田さん、良い趣味が見つかるということです。

その後は名前を言うだけの作業が続き、私の番です。

千「吉井 千秋です。趣味は読書と音楽鑑賞、それと、薬の調合です。それと……もし、アキ兄を傷つけたりしたら——」

私は懷から試験管を一本取り出し、それに入っていた薬品（名前は内緒です）を一滴垂らしました。

……坂本君の卓袱台に……

ジュワ ↑卓袱台が真ん中から解ける音

雄「なんで、俺の卓袱台をつかうんだ！」

坂本君だからじゃないですか。

雄「ひどいな！」

心の中までツツコミしないでください。

千「——こうなりますので気をつけてくださいね」

『『『『 yes / our scientist! ! ! ! ! 』』』』』

坂本君に私のところにあつた卓袱台を渡して座ります。次はアキ兄の番ですね。がんばれアキ兄！

明「えっと、吉井 明久です。一年間よろしくお願いします。——それと、誰を選ぶかは妹次第なので……僕に取り入ろうとしても無駄ですから」

『『『『 なんだてー！ 』』』』』

『そんな吉井！ いや、お義兄さん！ そんなこと言わないでくれ』

『そうだ！ そんなこと言ったら俺の人生計画がパーだ！ ! ! 』

明「知らないよ、そんなこと！ あと、お義兄さんなんて呼ばないで！」

あきれた風にしながら席に座るアキ兄……まったくこのクラスの人たちは何を考えているんだか。
そんな風に考えていると……

？「すみません。保健室によっていたら遅刻してしまつて」

発育の良い体に、ふんわりとしたピンク色の髪の子が教室に入ってきました。

福「ちょうど良かったです。今、自己紹介の途中だったので、姫路さんもお願いします」

瑞「はっはい。えっと、姫路 瑞希です。よろしくお願いします」

そう言つて頭を下げる瑞希ちゃん。すると……

『質問です』

疑問に思つた男子生徒の一人が質問します。

瑞「はっはい。なんででしょう？」

『吉井姉妹もそうなんです、なんでここにいるんですか？』

私達のもですか……そりゃあ、そうですね。

私達三人は普通に受けていれば、AクラスかBクラスは確実だったんですから。

瑞「えっと、その…実は試験の最中高熱を出してしまって」

明「僕は試験の前の日から熱出して寝込んで……って、今、姉妹って言わなかった？」

千「私はアキ兄の看病をしていて、試験の日は休みました」

明「無視！？」

Fクラスに来た理由を言うと、クラスの中から様々な言い訳（？）が聞こえてきます。

『オレも熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？ あれは、難しかったな』

『オレは弟が事故に遭ったって聞いて実力を出し切れなくて…』

『ああ、お前には妄想の中の弟がいたんだっただな』

『実は前の日、彼女が寝かしてくれなくてさ』

『今年一番の大嘘ありがとう』

『アキちゃん萌え』

本当にバカが多いクラスですね。

瑞「きつ緊張しました」

瑞希ちゃんが空いていた席に座って卓袱台に突っ伏します。昔からこう言うこと苦手でしたものね。

明「姫路さん、体はもう平気？」

瑞「あっはい。よっ吉井君!？」

アキ兄がショックを受けた様な顔をしています。

千「アキ兄、瑞希ちゃんは一瞬アキ兄が嫌で驚いたんじゃないやありませんよ？」

明「そうなの？ 良かった」

アキ兄が安堵したのか胸を撫で下ろします。よかった良かった。

雄「姫路、本当にもう大丈夫なのか？」

瑞「はい。もう平気です。え」と

雄「坂本だ。坂本 雄二。好きなように呼んでくれ」

瑞「姫路 瑞希です。よろしくお願いします」

そう言つて頭を下げる瑞希ちゃん。

…本当に礼儀正しいな……坂本君が相手なんだから、そんな事しなくてもいいのに。

雄「俺の扱い酷いな！」

「「？」」

坂本君は何を言ってるんでしょう？ 当然のことだと思いますが…？

千「瑞希ちゃん、お久しぶりです」

瑞「千秋ちゃん！ 何でFクラスに！？」

ふふつ。瑞希ちゃん、驚いてますね。

千「ちょっと、色々ありまして」

そんなやりとりをしていると……………

福「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

先生が教卓をたたきながら注意してきました……………そんなに叩いたら

バキィッ バラバラバラ……………

——壊れますよ？

一瞬のうちに教卓がゴミ屑になりました……………まあ、こんな教室の設備ですから、そうなりますよね。

く明久Sideく

福「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

姫路さん達と話していたら注意されてしまった……………

明「あ、すみませ——」

バキィッ バラバラバラ……………

突如、先生の前で、教卓がゴミ屑と化す。まさか軽く叩いただけで崩れ落ちるとは。どこまで最低な設備なんだろう。

福「え……………替えを用意してきます。少し待っていてください」

気まずそうに告げると、先生は早足に教室から出て行った。

瑞「あ、ははは……」

姫路さんも、どう反応したらいいか分からないという感じで、苦笑いしていた。

僕はともかく、姫路さんや千秋はAクラス確定だったはずなのに、体調不良だったり、僕の看病したりでFクラス入りなんて、可哀想すぎる……だったら。

僕は心の中である決心を固めた。

第三問 戦争の引き金（前書き）

久しぶりの投稿です。遅れてすみません。

~~~~~

#### バカテスト 第二問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『（１）得意なことでも失敗してしまうこと』

『（２）悪いことがあつた上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路 瑞希の答え

『（１）弘法も筆の誤り』

『（２）泣きつ面に蜂』

教師コメント

正解です。他にも（１）なら『河童の川流れ』や『サルも木から落ちる』、（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋 康太の答え

『（１）弘法の川流れ』

教師コメント

シユールな光景ですね。

坂本 雄二の答え

『（２）踏んだり殴ったり』

教師コメント

君は鬼ですか…

### 第三問 戦争の引き金

明「……雄二、ちょっといい？」

隣で欠伸をしている悪友に声をかけた。

雄「ん？ なんだ？」

明「ここじゃ話しにくいから、廊下で」

立ち上がって廊下に出る。その時、姫路さんと千秋と目が合った。千秋には、僕が雄二に何を言うつもりか分かっているだろう。

雄「んで？ 話ってなんだ？」

HR中だけあって廊下に人影はない。ここなら安心して話ができそうだ。

明「この教室について何だけど……」

雄「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

明「雄二もそう思うよね？」

雄「もちろんだ」

明「Aクラスの設備は見た？」

雄「ああ。凄かったな。あんな教室は他に見たことがない」

一方はチヨークすら無いひび割れた黒板で、もう一方は値段もわからない程立派なプラズマディスプレイ……

これに不満のない人間はいないだろう。無い人は、逆に凄いと思う。

明「そこで、僕からの提案。折角二年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」

雄「戦争、だと？」

明「うん。しかもAクラス相手に」

雄「……何が目的だ」

雄二の目が急に細くなる。警戒されてるみたいだ。……無理もないけど。

明「僕はともかく、姫路さんや千秋はAクラスでもおかしくないんだ。それに、こんな教室にいたら姫路さんみたいな体の弱い人はすぐに体調を崩しかねないよ」

雄「直球だったな。お前のことだし、理由を隠そうとするのかと思った」

僕の事を一体どう見てるんだこいつは……？

明「それより、やるの？ やらないの？」

雄「実のところ、俺も仕掛けようとは思ってたんだ」

明「雄二が？ 何で？」

雄「世の中、学力が全てじゃないと、証明してみたくてな」

明「ふう〜ん」

そういえば、前にそんなこと言っていたような……でも、今は関係ないか……

明「じゃあ、雄二！」

雄「ああ、やってやろうじゃないか」

明・雄「試験召喚戦争」

雄二と拳をぶつけ合い教室に戻った。ちょうど先生が戻ってきて、自己紹介の続きが始まった。

『須川亮です。趣味は——』

特に何も起こらず、また淡々とした自己紹介が続いた。

福「坂本君、キミが最後ですよ」

雄「了解」

先生に呼ばれて雄二が席を立つ。ゆっくりと教壇に歩み寄るその姿には、いつものふざけた雰囲気は見られず、クラスの代表として相応しい貫禄を身に纏っているように思えた。

千秋side

坂本君とアキ兄が、廊下で何を話していたのかは大体分かっている  
ので、特に追求はせずに私は静かに自己紹介を聞いていました。

福「坂本君、キミが最後ですよ」

雄「了解」

先生に呼ばれて坂本君は、教壇に向かって歩いていきます。こ  
ういつもの雰囲気が出ないのは、ある意味一種の才能ですね。

福「坂本君は、Fクラスの代表でしたよね？」

先生に問われ、頷く坂本君。別にクラス代表といっても、学年で最  
低の成績を修めた生徒達が集められるFクラスの話ですから、何の  
自慢にもなりません。……それにも拘らず、坂本君は自身に満ちた  
表情で教壇に上がり、私達の方に向き直りました。

雄「Fクラス代表の坂本雄二だ。オレのことは、坂本でも代表でも  
好きに呼んでくれ。さて、皆に一つ聞きたい」

坂本君の視線は教室内の各所に移りだします。

腐りかけの畳。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。



我がFクラスの代表は――

雄「――FクラスはAクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う!」

――試験戦争の引き金を引きました。

### 第三問 戦争の引き金（後書き）

作「ついに試召戦争が始まるですよ」

千「最初の相手はDクラスですか」

作「はい、Dクラスです。でもその前に一話分くらい入るかもしれません。ええ、入りますとも。これを入れないと話が進まないですよ」

千「それでは次回『強さの証明』お楽しみに」

第四問 強さの証明（前書き）

四日ぶりの投稿です。  
遅くてすみません。

バカテスト 第三問

以下の英文を訳しなさい

This is the bookshelf that my  
 grandmother had used regularly.

## 姫路 瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師コメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋 康太の答え

『これは  
教師コメント』

訳せたのはThisだけです。

## 坂本 雄二の答え

『これは本棚が愛用していた私の祖母です』

本棚と祖母が逆です。

## 第四問 強さの証明

『勝てる分けがない』

誰かがそう言った。そりゃあそうだ。

誰が見てもFクラスがAクラスに勝てるなんて思わないだろう。

ここ文月学園には、四年前から上限のないテストが採用されている。つまり、一時間という時間の中なら実力次第でどんどん成績を伸ばすことが可能だ。

そして、一年の終わりに行われる振り分け試験の結果、頭の良い人はAクラス、悪い人はFクラスといった風に振り分けられる。

AクラスとFクラスでは、点数に天と地ほどの差があり、Aクラス生徒一人を相手にするにもFクラスの生徒が、四人、いや、五人でも倒せるかどうか…

雄「いや、勝てる！ 俺が勝たせてみせる！」

自信満々にそう宣言する雄二。

雄「このクラスには、Aクラスに勝てる要素が揃っている。それを今から証明してやる」

そう言つて、雄二は姫路さんの方に視線を向けた。いや、正確には姫路さんの足元（？）を

雄「おい、康太。姫路のスカートを覗いてないで、前にこい」

康「……………！！（フルフルフル）」

瑞「は、はわ」

頬に跡をつけながらも首を横に振って否定してる……ある意味すごいよ。

雄「土屋 康太……こいつがあ有名な寡黙なる性識者だ！」  
ムツツリーニ

康「……………！！（フルフルフル）」

ムツツリーニ……その名は男子からは尊敬と畏敬、女子からは軽蔑を持って上げられる。

『ムツツリーニ……だと…』

『バカなあいつがそうだというのか？』

『だが見ろ。あそこまで明らかな証拠を未だに隠そうとしているぞ』

『ああ、ムツツリに恥じない姿だ』

瑞「？」

康「……………！！（フルフルフル）」

未だに否定を続けるムツツリーニ……。姫路さんはあまり聞かないからか頭にクエスチョンマークを出している。  
あれは、『ムツツリスケベ』って意味なんだけど……教えた方がいいのかな？

雄「姫路は説明するまでもないだろう。皆もその実力はよく知っているはずだ」

瑞「私ですか？」

雄「ああ。ウチの主戦力だ。期待してる」

『そうだ！ 俺たちには姫路さんがいるんだ』

『ああ、彼女ならAクラスに引けを取らないな』

『姫路さん、結婚してくれ』

確かに、姫路さんは学年でも上位の成績を持っている。Aクラスの生徒が相手でも十分にやりあえるだろう。あと、誰だ、姫路さんにモーレツなアタックしてる奴は…

雄「それに、木下 秀吉だっている」

秀「ワシもかの？」

秀吉は学力ではあまり名前を聞かないけど、他のことでは結構有名だったりする。

双子のお姉さんとか、演劇部のホープだとか…

『おお…』

『ああ…。アイツ確か、木下 優子の…』

雄「当然、俺も全力を尽くす」

『ああ、確かに何かやってくれそうだ』

『坂本って昔、神童とか呼ばれてなかったか？』

『じゃあ、姫路さんみたいに体調不良だったのか？』

『このクラスに、Aクラスレベルが二人もいるのかよ』

みんなが勝てるかもしれないという気持ちを持ち始め、士気がどんどん上がっていく…

認めたくないけど、雄二はこういうのがすごく上手いよなあ。

雄「それに忘れてないか？ このクラスに吉井兄弟がいることを！」

千「はい！」

明「うん。僕まで呼ばれていいのかな？」

僕と千秋も前に出る。

『吉井兄って、去年いきなり成績を上げた奴だよな』

『吉井 千秋って… もしや！』

雄「ああ、聞いたこともある奴もいるだろう。こいつ、吉井 千秋は『毒使いの巫女』だ！」

『『なんだって！！』』

『そんな！ 毒使いの巫女が本当に存在してたなんて！』

『あれは作り話とばかり…』

雄「デマなんかじゃないさ。こいつは、様々な薬と特殊な能力を使う力がある！ しかも、こいつの学力はAクラス並だ！」

そうなんだよね。千秋には特別な力。『予知夢』を視る力があつて、それを使つて、僕のことを結構助けてくれたりしたんだ。

雄「さらに、こいつらは『観察処分者』だ！」

シン

えっ、僕ら落ち扱い！？

『観察処分者ってバカの代名詞じゃなかったか？』

『でも、千秋さんも吉井も学力高かったよな？』

観察処分者 学園生活を営む上でちょっと問題のある生徒に課せられる処分のことで、僕等二人はそれに該当してたりする。

まあ、僕も千秋もいろいろと理由があるんだけどね。

雄「まあ、こいつらはバカの代名詞なんて呼ばれているが学力は高い。観察処分者に認定された理由は俺もよくは知らん」

瑞「あの。観察処分者ってなんですか？」

姫路さんみたいに頂点にいた人には馴染みのない言葉だろう。バカの代名詞なんて呼ばれるくらいだし。

雄「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類の事を特例として物に触れることのできる召喚獣でこなすといった具合だ」

本来、召喚獣は物に触れることはできない。触れることのできるのは他の召喚獣だけ。もっとも学園の床には特別な処理が施してあるらしいから立つことはできるけど。

でも、僕と千秋の召喚獣は違う。雄二の言った通り、物に触れることのできる特別製だ。

瑞「そうなんですか？ それってすごいですね。召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよ」

明「あはは、そんな大したものじゃないんだよ。逆にデメリットばっかだし」

確かに自分の思い通りに使役できるならそれはとても便利だ。なにせ召喚獣は一桁代の点数でもかなり強い。やろうと思えば岩だって碎けるだろう。

でも、召喚獣は教師の監視下でしか呼び出せないし、物に触れることのできる召喚獣の負担は、何割かは僕等にフィードバックされる。

『おいおい、観察処分者ってことは召喚獣がやわれると本人も苦しむってことだろ？』

『だよな。それならおいそれと召喚できないじゃないか』

『千秋さん、結婚してくれ』

千「お断りします」

そうなんだよね。フィードバックがあるからなるべく召喚したくないんだけど……. そうも言ってられないか。

後、千秋…もう少し柔らかく言ってあげようよ。

雄「おいおい、みんな忘れてないか？ 妹はAクラス、明久だつて今はBクラス並の実力があるんだからそう簡単にはやられないし、こいつらには観察処分者としての利点がある！ 観察処分者は教師の雑用を手伝うために何度も召喚獣を使っている分、俺たちより扱いに長けているんだ」

『そついや、召喚獣つて操作が難しいよな？』

『それじゃあ、点数が低くてもそれなりに戦えるってことだよな』

『あの二人は点数高いだろう？ 元から強いのに操作も上手いのかよ』

『これなら絶対に勝てるぞ！！』

みんなの士気がさつきよりも上がっている。雄二の奴これを狙ってたな。

雄「みんなこの現状は大いに不満だろう！？」

『『『当然だ！！』』』



D『宣戦布告の使者をぶちのめせ!』

亮『用件は伝えたからな!』

千秋Side

須川君が帰って来てから私達は屋上でミーティングです。

秀「雄二よ。気になっておったんじゃが、なぜDクラスなのじゃ？  
段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負にでるならAクラスじゃろう?」

瑞「そういえば、確かにそうですね」

雄「まあな。当然、考えがあつてのことだ」

坂本君がなぜDクラスから攻めるのか皆は気になっているようです。  
まあ、私は知っていますが。

瑞「どんな考えなんですか?」

雄「まず、Eクラスを攻めない理由だが、戦うまでもない相手だからだ」

明「でも、Eクラスは僕たちよりクラスは上だよな?」

雄「それはあくまで振り分け試験の結果だろう? 明久、お前の周りの奴らについて言ってみろ」

いやな予感しかしないんですが。

明「えっと、美少女が四人と、バカとムツツリが一人ずついるね！」

雄「誰が美少女だと！」

明「雄二が美少女に反応するの!？」

康「……………（ポッ）」

秀「明久よ、ワシまで美少女に入れておらぬか!？」

明「ムツツリー二に秀吉まで!？ どうしよう千秋、僕一人じゃツッコミきれないよ」

ああ、やっぱりですか。

千「坂本君はバカですし、土屋君はムツツリです。木下君は……諦めてください」

秀「お主まで！ なんと言おうとワシは、正真正銘の男なのじゃ！」

そんなかわいい顔してるからですよ。まったくうらやましい。

雄「ま、要するにだ」

コホン、と咳払いをして説明を再開する坂本君。

雄「姫路に妹、それに明久がいるんだ。正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上、Eクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

秀「？ それではDクラスとでは厳しいのかの？」

雄「いや、Dクラスを相手にしても勝てるだろうが、その後の戦いの事を考えるとDクラスとやっておいた方がいい」

明「ふん」

アキ兄、絶対分かってませんね。

明「でも大丈夫なの？ どんな作戦でも勝てなかったら意味ないよ？」

雄「負けるわけないさ」

坂本君、いやに自信満々ですよ。坂本君らしいと言えば坂本君らしいですけど。

雄「いいか、お前等。ウチのクラスは——最強だ」

本当に不思議ですね。全然根拠なんか無いのにそうだと思います。

美「いいわね。面白そうじゃない！」

秀「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやろうかの」

康「……………（グッ）」

瑞「が、頑張りますっ」

千「絶対に勝つてみせますよ」

明「勝たないといけない理由があるしね」

打倒Aクラス！ 頑張りますよ！

雄「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、私達は勝利の為の作戦を聞いていました。

ちなみに、ミーティングが終わった後、お昼ごはんを食べました。  
私がお弁当を持ってきたのを見て、皆さんが驚いてみてたんですよ。  
？ お弁当を作ってきたことってそんなに驚くことなんでしょうか。

#### 第四問 強さの証明（後書き）

作「強さの証明はどうでしたでしょうか」

千「まだDクラス戦は始まらないんですか？」

作「とりあえず、次から試召戦争が始まるよ」

千「相変わらず遅いですね」

作「それを知らないで」

千「では、次回『Dクラス戦開始！』お楽しみに」

## 第五問 Dクラス戦開始!?(前書き)

新話投稿します!

楽しみにされてた方々、遅れて申し訳ありません。

~~~~~

バカテスト 第四問

問 以下の問いに答えなさい。

『(1) $4\sin X + 3\cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するXの値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のうちどれか、?
? ?の中から選びなさい。

? $\sin A + \cos B$? $\sin A - \cos B$? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$ 『

姫路 瑞希の答え

『(1) X = $\pi/6$

(2) ? 』

教師コメント

そうですね。角度を『 $\circ$ 』ではなく『 π 』で書いてありますし完璧です。

土屋 康太の答え

『(1) X = およそ3』

教師コメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちは分かりますが、これでは回答に近くても点数は上げられません。

吉井 明久の答え

『(2) ? ? ? のどれか』

教師コメント

どれか一つに絞ってください。

第五問 Dクラス戦開始！？

千「アキ兄、私も前線に言っちゃだめですかね？」

明「僕に聞かれても…雄二に聞いてみたら？ 一応代表だし」

それもそうですね。

千「坂本くん！」

雄「なんだ？ 妹」

千「私も前線に「だめだ」…何ですか」

雄「お前らはウチの切り札だぞ？ そう簡単に前にだせるか！」

千「私の他にもアキ兄とか瑞希ちゃんがいるじゃないですか」

私より瑞希ちゃんの方が頭良いし、アキ兄は私より操作が上手いし。

千「私がいなくても大丈夫でしょう？」

雄「あゝったく。分かったわかった。でも、行ってもいいがなるべく、すぐに戻ってこいよ」

千「はい。それじゃあ、行ってきます」

美波Side

F「隊長！ 前線部隊が交戦状態に入りました！」

美「そう。じゃあ、ウチ達もでるわよ！」

『『『おおー！』『』』

ウチ達中堅部隊が戦場に向かって走って行くと、前線で戦っていたはずの木下たちがこちらに走ってきた。

秀「島田よ、来てくれたのじゃな」

美「木下、大丈夫？」

秀「うむ。戦死は免れておるが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったのじゃ」

美「そうなの？ 召喚獣の様子は？」

秀「もうかなりヘロヘロじゃな。これ以上の戦闘は無理じゃ」

？「なら、早く戻ってテストを受けて来てください」

千秋Side

千「なら、早く戻ってテストを受けて来てください」

美「吉井さん、来てたの？」

秀「お主は教室で明久達と待機じゃと聞いておったんじゃが」

島田さんと木下君が驚いています。もう少し後に来た方が面白かったですかね？

千「坂本君にお願いしてきちゃいました」

美「まあ、あんたが来てくれれば早く終わりそうだからこっちはありがたいんだけどね」

千「それより、木下君は前線部隊の人たちを連れて回復試験を受けて来てください。島田さん、私も一緒に戦いますので」

秀「そうさせてもらうのじゃ」

美「それじゃあ、吉井さん、お願いね」

千「はい。任せてください！」

木下君は前線部隊の人たちを連れて教室に戻りました。

私は島田さんたち、中堅部隊の人たちと前線まで突っ切ります！

前線にいるDクラス生徒は大体10人位。今いる先生は学年主任の高橋先生、それに……化学の五十嵐先生に布施先生！

千「！ 島田さん、化学の先生がいるので一気に終わらせます。部隊の人たちを少し後ろに下がらせてください」

美「大丈夫なの？」

千「私の化学の成績、知ってるでしょう？」

美「分かった。でも、無茶はしないでよね」

私は島田さんに「もちろん」と言ってから最前線にでて、宣言しました。

千「五十嵐先生！ Fクラスの吉井がここにいるDクラス生徒全員に化学勝負を挑みます」

「『『『試獣召喚！』『』『』」

出てきた私の召喚獣は文月の制服に弓道で使うような防具、武器は日本刀です。

『Fクラス	吉井 千秋	V S	Dクラス×10
化学	420点	V S	平均80点

D『『『なにー！ー！』『』『』

千「いきますよ」

私の召喚獣が床に武器の日本刀を刺し、腕輪を発動させます。

千「『^{フリーズ}氷結』『』」

キーワードを呟いたとたん床とDクラス生徒の召喚獣の足が凍りました。

動けなくなった召喚獣を切り捨てていきます。

これ、気持ちいいですね。

『Fクラス	吉井 千秋	V S	Dクラス×10
化学	370点	V S	0点
			』

鉄「戦死者は全員補習！」

戦死したDクラスの皆さんは補習担当教師、鉄人こと西村先生に連れていかれました。
ご愁傷様です。

千「それじゃあ、島田さん。教室に戻りましょうか」

私は中堅部隊の人たちと教室に戻り、化学のテストを受け直しました。

雄「それじゃあ、Dクラス代表の首をとりに行くぞ！」

『『『おおー！』『』』

さて、私も頑張っていきますよー！

今は、渡り廊下で交戦中です。Dクラスも本隊が出てきて最終局面
って感じがします。

千「アキ兄、床を凍らせるので後をお願いします」

明「分かった」

さっきのように床を凍らせて、アキ兄に倒してもらいます。

大体本隊の半分くらいを補習室送りにしたところで瑞希ちゃんがD
クラス代表の平賀君を倒し、試召戦争が終わりました。

第五問 Dクラス戦開始！？（後書き）

作「うう」

千「どうしたんですか？」

作「坂本君で遊べなかったです」

千「それもそうですね」

作「実は最初の予定だと、千秋が2、3人倒したら教室に戻って、須川君が校内放送を流す予定だったんですが……大幅に変更することになってしまって」

千「それは残念ですね……坂本君は弄り甲斐がありますから、遊んだら楽しそうですね」

作「まあ、その分後から弄りますが」

千「私も楽しみですよ……では、次回『戦後対談とお弁当は世界レベル！？』お楽しみに」

第六問 戦後対談とお弁当は世界レベル！？

Dクラス代表 平賀 源二 討死

『『うおおーっ！』』

その知らせを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校内を駆け巡った。

『凄えよ！ 本当にDクラスに勝てるなんて！』

『これで畳や卓袱台ともおさらばだな！』

『ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな』

『坂本 雄二サマサマだな！』

『やっぱり凄い奴だったんだな』

『坂本万歳！』

『姫路さん結婚して！』

『千秋さん好きだ！』

代表である雄二を褒め称える声があちこちから聞こえてきた。なんか女子にアツクしてる奴もいるみたいだけど。

さっきまで雄二が居た方を見るとがっくりとうなだれているDクラス生徒たちの奥でFクラスみんなに囲まれている姿があった。

雄「あー、まあ。なんだ。そう手放して褒められると、なんつーか……」

頬をポリポリと掻きながら明後日の方向を見る雄二。照れてるなんて意外だなあ。

『坂本！ 握手してくれ！』

『俺も！』

もう英雄扱い。この光景を見るだけでどれだけ皆がああ教室に不満を抱いていたかが分かる。
そりゃ嫌だよな。畳の一部腐ってたし。

明「雄二！」

雄「ん？ 明久か」

僕が声を掛けると雄二は振り向いてこっちを見る。

明「お疲れ様、雄二」

雄「おう、そっちこそ」

雄二に駆け寄って握手する。
すると、

雄「おい、明久。妹はどうしたんだ？ お前と一緒にいたよな？」

明「ああ、千秋なら『今日使った分の薬を作ってきます』って理科室にいったよ」

雄「…あいつは何を作る気なんだ」

雄二の顔が青くなっていく。想像しないことをオススメするよ。

？「まさか、姫路さんがFクラスにいたなんて……信じられん」

後ろから誰かの声が聞こえたので振り返ってみると、平賀君がこちらに歩みよってきた。

瑞「あ、その、さっきはすみません……」

違う方向から姫路さんも駆け寄ってくる。

源「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺たちが悪いんだ」

これも勝負。騙まし討ちっぽかったけど、平賀君の言う通り姫路さんが謝る必要は全くない。

源「ルールに従ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日の朝でも良いか？」

敗残の将か。なんだか可哀想に見える。これから彼は再び試召戦争を行使できる権利が回復するまでの三ヶ月間を、あの教室でクラスメイトに恨まれながら過ごさなくてはならない。

勝てば英雄のように扱われるのが代表なら、負ければ戦犯として扱われるのも代表なのだから。

明「もちろん明日で良いよね、雄二」

こんな姿を見て今日中に済ませろなんて言えないので、僕は雄二にそう聞いた。

雄「いや、その必要はない」

すると、雄二は僕の予想しなかった返事をしてきた。

明「え？　なんで？」

千「Dクラスを奪う気がないからでしょう？」

別の声がした方を見ると、薬の調合を終えたらしい千秋がこっちに歩み寄って来た。

明「あ、千秋おかえり」

千「ただいมาแล้ว。アキ兄」

明「それより、Dクラスを奪う気はないってどういうこと？」

千「忘れたんですか？　アキ兄。私たちの目標はあくまでAクラスなんですよ？」

おっと、そういえばそうだった。

雄「ってわけで、Dクラスの設定には手を出すつもりはない」

源「それは俺達にはありがたいが……。それでいいのか？」

雄「勿論、条件がある」

いつの間にか戦後対談が再開していた……。途中からでも一応聞いておこう。

源「一応、聞かせてもらおうか」

雄「なに。そんな大した事じゃない。俺が指示したら窓の外に設置してあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

雄二が窓際に行つて指したのは、Dクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。

でも、この室外機はDクラスの物じゃない。

ちょっと貧しい普通の高校レベルの設備でしかないDクラスにエアコンなんてものはないのだから。置いてあるのは、スペースの関係でここに間借りしている――

源「Bクラスの室外機か」

雄「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」

悪い取引であるはずがない。うまく事故に見せかければ厳重注意で済み、それだけで三ヶ月もの期間をあの教室で過ごすという状態から逃れられるのだから。

源「それはこちらとしては願ってもない提案だが、なぜそんなことを？」

雄「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」

源「……そうか。では、こちらはありがたくその提案を吞ませて貰おう」

雄「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行ってもいいぞ」

源「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願ってるよ」

雄「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思ってるだろ？」

源「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな」

じゃあ、と手を挙げて平賀君は帰っていった。

雄「さて、皆！ 今日のご苦労だった！ 明日は消耗した点数の補充を行うから、今日のところは帰ってゆっくり休んでくれ！ 解散！！！」

雄二が号令をかけると、皆は雑談を交えながら自分のクラスへ向かい始めた。

僕達も早く帰らないと。

明「雄二、千秋。僕達も帰ろうか」

雄「そうだな」

千「はい。あ、でも少し待ってください。瑞希ちゃんに話しておきたいことがあるので」

明「じゃあ、教室で待ってるよ」

千「はい。すぐに終わるので」

そう言って少し離れたところで話始めた千秋と姫路さん。一体何を話してるんだろう？

少しすると、千秋が姫路さんと一緒に教室に入ってきた。

千「おまたせです。アキ兄」

明「じゃあ、帰ろうか」

千「アキ兄、ちゃんと教科書持ちましたか？ 明日はテストなんですから教科書くらいは読んでおかないとだめですよ？」

明「分かってるって」

千秋 Side

次の日の朝……

明・千「「おはよう（いざいます）」」

雄「おう？ 明久に妹か、朝から仲の良いこった」

千「兄妹ですから！」

坂本君が英語の教科書片手に私達に挨拶してきました。

千「坂本君、英語じゃなくて歴史の勉強をすることをオススメしますよ？」

雄「なんだ、作戦のこと知ってるのか」

千「はい。まあ、アキ兄や瑞希ちゃんがいるので大丈夫だとは思いますが、もしものの為の保険です。ちなみに、私が視た夢では、代表戦で坂本君が負けて、設備が一つ落ちました」

卓袱台の代わりにみかん箱が出るのだけはやめてもらいたいですよ。

雄「そうか、俺の他の奴らの勝敗は？ お前の口ぶりから察するに、俺と翔子以外にも戦ったんだろ？」

自分の席にカバンを置いてから、坂本君と向き合って夢で私が視たところまでの話をしました。

雄「そうか……分かった、俺が勝たないと意味がねえってことだな。なら、しばらくは歴史の勉強しておかねえとな」

千「負けたら……（ニコッ）」

雄「……………（ブルブルブル）」

坂本君はテストをしている間、ずっと顔を青くしていました。負けたときのお仕置きも考えておかないと。

千「アキ兄、お昼にしましょう！」

四時限目のテストが終わりお昼休みです。

今日はアキ兄がお弁当を作ってくれたので凄く楽しみなんですよ。

明「じゃあ、今日は天気が良いし、屋上で食べようか」

千「はい！」

アキ兄と一緒にお昼ご飯！ 二人でお昼を食べるのは久しぶりです。

明「せっかくだから、他の皆も呼ぶ？」

ガクッ！

アキ兄と二人で食べれると思ったのに……

明「嫌だった？」

千「……いえ、良いと思います」

明「じゃあ……雄二！」

雄「何だ、明久か。なんか用か？」

明「うん。今日は天気もいいし、屋上に行こうと思うんだけど、一緒にどう？」

雄「Bクラス戦の話もしたいから別に構わないんだが、俺は弁当じ

やねえから購買でパンでも買ってから行くとするよ」

瑞「あ、あの。吉井君。わ、私も一緒にしても良いですか？」

瑞希ちゃんもですか。まあ、もう諦めましたけど。

瑞「それで、ですね。あの…私、お弁当作ってきたので、その、よ、吉井君に食べてもらいたくて！」

あの瑞希ちゃんが…作ってきた……んですか？

明「えっと、その…」

雄「良かったな明久、姫路の手作り弁当なんて」

アキ兄……死なないで下さいね。

美「瑞希、ウチも一緒に行っていいい？」

秀「ワシも行くぞい」

康「……………オレも」

瑞「皆さんも食べれるくらいの量がありますから、どうぞ」

屋上に来て、瑞希ちゃんの持ってきたお弁当の中を見ると、見た目はおいしそうでした。
見た目だけは…

瑞「土屋君！　大丈夫ですか！？」

瑞希ちゃんのお弁当を食べた土屋君が白目をむいて倒れました。

千「瑞希ちゃん、今度は何を入れたんですか？」

瑞「え、えっと」

雄「おい、妹。『今度は』って、前にも何か入れてたのか？」

千「はい。前は卵焼きに硝酸カリウムを入れていました」

あの時は恐かったですよ。味見をしてくれてたアキ兄がぶっ倒れて病院に搬送されたんですから。

雄「姫路にそんな欠点があるとは」

瑞「悪気があったわけじゃないんですよ。美味しさの秘訣を教えてくださいだったので試したかっただけで…」

千「試したいだけだっていうなら、何でもまた薬品を入れるんですか！」

アキ兄が世界で上位なら瑞希ちゃんはワースト上位ですよ！

千「瑞希ちゃんはまだ料理を作らないで下さい！」

明「千秋、それは言いすぎじゃ…」

千「これくらいがちょうどいいんですよ。何度言っても聞かないん

ですから」

後でO H A N A S I……いや、お説教しないといけませんね。

千「瑞希ちゃん、今日泊まりにいきますね。しっかり身体に教え込んであげます」

瑞「できれば、遠慮したいんですけど……」

千「アキ兄、今日は瑞希ちゃんの家泊まりますので、夕飯は冷蔵庫にあるもので作って食べててください」

明「うん……がんばってね」

今日の夜が楽しみです………

雄「あー……試召戦争の話にいいかい？」

ああ、そんな話がありましたね。

千「はい。どうぞ」

美「そういえば、次の目標ってBクラスなのよね」

秀「そうじゃ、何故Bクラスなのじゃ？」

雄「はつきり言おう。今の戦力じゃ、Aクラスには勝てない」

Aクラスの人とまともに戦えるのは私と瑞希ちゃん、アキ兄くらい。他の人じゃ即死……普通に戦って勝てるわけがないですよ。

美「じゃあ、最終目標はBクラスに変更ってこと？」

雄「いや、Aクラスをやる」

明「雄二、さつきと言ってることがちがうじゃないか」

雄「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

明「一騎打ちに？ どうやって？」

雄「Bクラスを使う」

坂本君がやることはわかってるので、気をつけないと……あれは見るに耐えないんですよ。

雄「設備の交換をしない代わりにAクラスに攻め込むよう交渉する。Fクラスの設備になるよりAクラスに負けてCクラスの設備になるほうがいいはずだからな」

明「それで？」

雄「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

明「なるほどねー」

翔子ちゃんが相手なら坂本君を捧げれば応じてくれそうなんですけど…

雄「妹、お前なんか酷いこと考えてないか？」

千「なんのことですか？」

まったく敏感ですね

雄「まあ、それは良いとして。明久、テストが終わったらBクラスに宣戦布告してこい」

明「やだ。雄二が行けば良いじゃないか」

千「坂本君、私が行きますよ。Bクラスの代表にちょっと用事があるので」

雄「Bクラスの代表と中が良いのか？」

千「あんなのと仲良くなりたくありませんよ。ただ、ちょっとアレの身体に教え込まないといけないことがあつて」

ああ、根本君。女性に対しての対応の仕方をきっちり教えてあげますから覚悟してください。

明「雄二、やっぱり僕が行くよ。千秋に行かせたら、大変なことになるそう」

雄「奇遇だな、俺も自分で言ったほうが良いんじゃないかと思ったところだ」

（千秋（妹）に行かせたら、Bクラスの代表が死ぬ）

結局、アキ兄がBクラスに行きました。
アキ兄を傷つけた奴は全員補習室に送らないと……

第六問 戦後対談とお弁当は世界レベル!? (後書き)

千「せっかく根本にいろいろ(身体に)教えてあげようと思ってたのに」

作「いくら根本でもかわいそうでしょ」

千「あれに可哀相なんて思う必要はありません」

作「根本は戦後対談の時にいじるのが楽しいんだよ!」

千「……………」

作「でも、Aクラスの人が可哀相だから弄り過ぎないようにしないとね……」

千「(根本君…初めて貴方が可哀相だと思えました)…えっと、次回は『Bクラスと恋文と女の強さ』お楽しみに」

第七問 Bクラスと恋文と女の強さ（前編）（前書き）

一ヶ月ぶり？ の投稿です。
遅くなつてすみません。

もう少し早くできたならよかったのですが…

（．．．．．）

バカテスト 第六問

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

吉井 千秋の答え

『C6H6』

教師コメント

簡単でしたか？

土屋 康太の答え

『ベン+ゼン＝ベンゼン』

教師コメント

君は化学をなめていますか。

須川 亮の答え

『B-E-N-Z-E-N』

教師コメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。

第七問 Bクラスと恋文と女の強さ（前編）

明「後5分か……」

今日はBクラスとの試召戦争。

しかも、代表はあの根本君だ。

千秋が先に一手打ったって言ってたけど、どうなるか分からない。

雄二と千秋の作戦が上手く行くといいんだけど。

遡ること約十分前……

雄「よし、これから今日の試召戦争の作戦を言っぞ」

雄二と千秋が壇上に上がって試召戦争の話始めた。

千「今回は相手を教室に押し込める為に全力で行きます。なので、クラスの半分以上を前線に出します。始まったらすぐに誰でもいいです、腕輪を使ってください」

雄「それだけで相手の士気をある程度下げることが出来る筈だ」

確かに腕輪を初っ端から使ったら相手は恐がるだろうな。

秀「じゃが、誰が使っのじゃ？ このクラスで腕輪を使える者は限られておるぞ」

雄「とりあえず姫路に頼むとするか。科目は数学にする予定だからな」

瑞「が、がんばります」

千「瑞希ちゃんが前線の部隊長をしてください。（主に士気を上げるためですが）」

雄「お前ら、意地でも勝て！ 俺らの強さをBクラスのクズに見せ付けてやれ！」

『『『おおっーーーーー！！！！』』』

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。いよいよBクラス戦開始だ。

雄「よし、行つて来い！ 目指すはシステムデスクだ！」

『『サー、イエッサー！！』』

今回は敵を教室に押し込むことが目的なので、とにかく勢いが重要となる。

僕らはほぼ全力でBクラスへと向かう廊下を駆け出した。

F「いたぞ、Bクラスだ！」

F2「高橋先生を連れてるぞ！」

正面を見ると、ゆっくりとした足取りでBクラスのメンバーが歩いてくる姿があった。人数は十人程度。あくまで様子見といった感じ

だ。

明「高橋先生、吉井明久が総合科目で勝負を挑みます！」

洋「承認します」

『「試獣召喚！」』

『Fクラス 吉井 明久 V Bクラス 野中 長男
総合 1896点 VS 1943点 』

B「なつ、コイツ本当にFクラスか!？」

B2「オレ達と同じくらいあるぞ！」

明「いくぞ！」

ザシュツ！

『Fクラス 吉井 明久 V Bクラス 野中 長男
総合 1896点 VS 0点 』

鉄「0点になった戦死者は補習！」

長「いやだー。鬼の補習はいやだー！」

野中君、ご愁傷様……

瑞「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

千「アキ兄、遅れました」

B「来たぞ！ 姫路と吉井だ！」

Bクラスの誰かが叫ぶ。やっぱり、姫路さんと千秋がAクラスにいないことは知ってたか。

明「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど……」

瑞「は、はい。行つて、きます」

息を切らしながらも戦場に走っていく姫路さん。なんか、癒されるな。

律「長谷川先生、Bクラス岩下 律子がFクラス姫路 瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

瑞「あ、長谷川先生。姫路 瑞希です。よろしくお願いします」

早速勝負を挑まれる姫路さん。雄二に言われた作戦を実行するにはちょうどいいだろう。

真「律子、私も手伝う！」

二人がかりで来るとは余程警戒してるな。姫路さん、大丈夫かな？

「「「試獣召喚」」」

おなじみのキーワードに応じて魔法陣が展開、三人の召喚獣が姿を現した。

敵の二体は剣と槍を構え、姫路さんのほうは背丈の倍はあるであろう大剣を軽々と持っていた。

しかも、左手首にキレイな腕輪を着けていた。

瑞「じゃあ、いきますね」

姫路さんが小さな手をキュツと握りこむとその動きに合わせて姫路さんの左手を敵に向けた。

律「ちよつ、腕輪持ち!？」

真「そんなのに勝てるわけ!」

キュボツ!

『きゃあああーっ!』

左腕から光線がほとばしったと思った瞬間、二人の召喚獣が炎に包まれながら消えて行った。

『Fクラス 姫路 瑞希 VS Bクラス 岩下 律子&菊入
真由美

数学 412点 VS 189点 & 15
1点 』

B「なっ! そんな馬鹿な!？」

B2「岩下と菊入が戦死するなんて」

B3「姫路 瑞希、噂以上に危険な相手だ!」

残っているBクラスの人たちに驚愕の表情が浮かぶ。雄二の作戦、第一段階は成功と言ったところか。

瑞「み、皆さん、頑張ってください！」

姫路さんの指揮官らしくない指示。でも、これはこれで効果絶大だ。

F「やったるでえーっ！」

F2「姫路さんサイコーッ！」

信者急増中。

明「姫路さん、とりあえず下がって」

瑞「あ、はい」

明「千秋、行くよ」

千「はい！ 一気に蹴散らしますよ」

敵の士気も挫いたし、姫路さんには一旦下がってもらった方が良さそうだ。

腕輪を使うと点数が結構下がるから今は温存してもらおう。

千「アキ兄、木下君と一旦教室に戻ってください」

明「えっ、なんで」

千「忘れたんですか？ Bクラスの代表は根本君ですよ？」

明「それもそうだね。根本君なら何か仕掛けてきてもおかしくない。
…秀吉、僕らは一旦教室に戻ろう」

秀「分かったのじゃ」

教室が無事だといいいんだけど。

千秋Side

アキ兄と木下君は戻りましたね。
一応手は打ってあるので心配はいらないと思いますが、ちょっと心配です。

千「瑞希ちゃん」

瑞「なんですか？」

千「この間話した手紙は大丈夫ですか？」

瑞「はい。千秋ちゃんに言われた通りにしてあります」

千「そうですか。私も書いてカバンに入れてきたので面白いことになりますよ」

瑞「本当に容赦ありませんね」

千「当たり前です。人のラブ「わーっ！」なんですか？」

瑞「お、大きな声で言わないで下さい。恥ずかしいじゃないですか！」

千「瑞希ちゃんはまだ少し大胆になったらどうですか？　じゃないと好きな人に気付いてもらえませんか？　あの人は鈍感ですから」

瑞「大胆につて……」

瑞希ちゃんになら任せてもいいと思っていますからね。

千「（がんばってくださいね。二人共）」

明久Side

明「これは酷いね」

秀「そうじゃのう。ここまでやるとは」

教室に引き返してきた僕達を迎えたのは、穴だらけになった卓袱台とへし折られたシャーペンや消しゴムだった。

明「酷いね。これじゃ補給がままならない」

秀「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

でも、

明「千秋の言ったとおりだ」

秀「卓袱台以外は極力持ち歩いottaからの」

そう、僕らは千秋の指示で各自ワンセットずつ筆記用具を持ち歩いていた。

これならへたな嫌がらせがあっても平気だしね。
本当にやるとは思わなかったけど。

雄「なんだ、お前ら。戻ってたのか」

明「あつ、雄二、おかえり」

秀「どこに行っておったのじゃ？」

雄「Bクラスが協定を結びたいと言ってきてな。調印に行ってた」

明「協定？」

雄「ああ。四時までに決着が付かなかったら戦況をそのままにして
続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関する一切の
行為を禁止する。ってな」

明「それ、承諾したの？」

雄「ああ、元からそうなるのは妹から聞いてある程度は知ってたからな」

僕、そんな事聞いてないんだけど…

秀「じゃが、体力勝負に持ち込んだほうが有利だと思っのじゃが」

そりゃそうだ、運動部中心のEクラスには負けるだらうけどBクラ

ス程度に遅れはとらない。

鉄人から日々逃げ回ってるからね。

雄「確かに、殆どの奴らは大丈夫だろうが、姫路と妹がな」

あ、そっか。

雄「あいつ等を教室に押し込んだあたりで今日の戦争は終わりだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

明「そうだね。今日中に落とせそうもないか」

おそらく明日は姫路さんと千秋の力が一番重要になるだろう。僕はあまり役に立ちそうもない。

明「明日は、姫路さんと千秋が万全の状態で戦えそうだね」

雄「ああ、この協定は俺たちにとってかなり都合がいい」

でも、ちょっと納得のいかない所がある。

あの根本君がこんな嫌がらせをする為だけに協定、しかも、こっちに都合のいいようなものを結ぶとは思えない。

雄「まあ、細かいことは後だな。今はあいつ等を今日中に教室に押し込むことを考えろ」

明「それもそうだね。とりあえず僕らは前線に一回戻るよ。向こうでも何か起きてたら大変だし」

秀「うむ。雄二よ、教室の方は頼んだぞい」

雄「おう。卓袱台の修理だけならそんなに時間はかからないだろう。
お前らは思いっきり戦って来い」

明「じゃあ、行って来るね」

そう言って僕等は教室を出た。

第七問 Bクラスと恋文と女の強さ（前編）（後書き）

千「ずいぶんと遅くなってしまいました」

作「楽しみにしてくれていた方々、本当に申し訳ありません」
「」< しかも、Bクラス戦を前編・後編に分ける結果になりました」

千「前編は、根本君の卑怯なはずらまで！」

作「千秋の夢見の力のおかげで被害が少なくなってます。次回も千秋の力に期待ですよ」

千「アキ兄の幸せは私が守ってみせますよ！ とまあ、今回はこれくらいにして、次回は、『Bクラスと恋文と女の強さ（後編）』お楽しみに」

第八問 Bクラスと恋文と女の強さ（後編）（前書き）

今度は二ヶ月近くかかったビジュエツトです…はい。申し訳ありません……<（―――）>

バカテスト 第七問

以下の問いに答えなさい。

『good および bad の比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路 瑞希の答え

good	good
-	-
better	worse
-	-
best	worst

教師コメント
その通りです。

吉井 千秋の答え

教師コメント

残念ながら、これは違います。

goodやbadの比較級と最上級は語尾に -er や -est をつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋 康太の答え

bad - butter - bust

教師コメント

「悪い」

「乳製品」

「おっぱい」

第八問 Bクラスと恋文と女の強さ（後編）

明「それじゃあ秀吉、気をつけてね」

秀「うむ。そつちも気をつけるのじゃぞ」

そう言つて僕たちはそれぞれの部隊に戻つていった。

亮「吉井！ 戻つてきたか！」

出迎えてくれたのは須川君。ここの指揮は千秋が姫路さん達と取つてる筈なんだけど。

明「須川君、今の戦況は？」

亮「さつき、島田が人質に取られたが吉井さんが助けてそのまま木下達の援護に行った」

明「ありがとう、須川君。僕も一暴れしてくるよ」

協定の時間まであと三十分。

それまでに出来るだけ削つておこつ。教室に押し込むことは殆ど終わってるし。

明「吉井 明久行きます！ 試獣召喚！」

——三十分後

鉄「協定により、戦争中断！」

Bクラス前の廊下に鉄人の声が響く。

今日の試召戦争が終わって、僕らはそれぞれの教室に戻った。

明「ただいま」

千「おかえりなさい。アキ兄」

瑞「お疲れ様です、吉井君」

教室に入ると千秋と姫路さんが出迎えてくれた。

雄「明久、帰ったか」

明「あ、雄二」

雄「これからCクラスに行くから準備しろ」

明「Cクラス？ 何でまた」

今はBクラスとの戦争中だし、Cクラスと関わることはないと思うんだけど。

雄「根元の奴が俺たちを待ち伏せしてるらしいからな。本当は行きたくないんだが、Cクラスの連中が戦争の準備をはじめてる」

確かにそれなら大変だ。Bクラスに勝ったとしてもCクラスの人たちに攻められたら正直勝てる気がしない。

明「確かに、Cクラスとの連戦は厳しいね」

雄「そんなわけで、俺と明久、ムツツリー二に島田と姫路、あと須川で行く」

明「あれ？ 千秋と秀吉は？」

雄「妹には別の仕事を任せてある。秀吉は明日やる予定の作戦があるからな、顔を見られるわけにはいかない」

別の仕事？ なんだろう。またなんか薬でも作ってるのかな？ それに、作戦って…

美「それはそうと、行くなら早く行きましょ？ Cクラスの代表が帰っちゃうわよ？」

島田さんの一言で僕たちはCクラスに向かった。

Cクラスでは根本が待ち伏せしてたり、Bクラスの人と戦うことになったり。

殆ど千秋が言ってた通りだったらしいけど。

—— 翌日

雄「昨日言っていた作戦を実行する」

明「作戦？ でも、開戦時間はまだ——」

雄「ああ、この作戦はBクラス相手じゃない。Cクラスだ」

明「あ、なるほど…それで、なにをするの？」

雄「妹。昨日頼んだヤツを」

千「はい！」

千秋が鞆から出したのは文月学園の女子制服。

こんなものを頼んで、雄二は一体何をする気なんだ？

雄「これを秀吉に着てもらっ」

秀「それは別に構わんが…ワシが女装してどうするのじゃ？」

千「秀吉君には、『木下 優子』としてCクラスに行ってもらいた
いんです」

秀「何ゆえ姉上のフリをしてCクラスにいかねばならんのじゃ？」

雄「Aクラスの使者を装い、Cクラスの敵意がAクラスに向くよう
にしてみたい」

千「それには、優子ちゃんのフリをするのが一番なんです」

雄「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

秀「う、うむ……」

千秋から制服を受け取り、その場で生着替えを始める秀吉。

康「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

ムツツリーニは指が擦り切れるんじゃないかと言つくらいに凄い速さでカメラのシャッターを切っていた。

秀「よし、着替え終わったぞい」

雄「んじゃ、Cクラスに行くか」

秀「うむ」

千「楽しみですな」

明「……何が？」

雄「二達と一緒に教室を出て、Cクラスへと向かう。」

千秋は楽しみと言ってたけど、一体何が起るんだろうか。

そのまましばらく歩き、Cクラスを目の前にして立ち止まる僕達。

雄「さて、ここからはすまないが一人で頼むぞ、秀吉」

秀「気が進まんのう……」

千「そこを何とかお願いします」

千秋が下から目線（身長のせいだけ）で秀吉にお願いをする。

秀「／／ま、まあ……こ、これも作戦じゃからな。……わ、わかったのじゃ／／」

秀吉、なんだか顔が赤いけど大丈夫かな？

雄「とにかくあいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くよう仕向けてくれ。お前なら出来るはずだ」

秀吉は演劇部のホープと呼ばれるくらい演技が上手い。
双子のお姉さんの真似くらい簡単だろう。

秀「はあ……。あまり期待はせんでくれよ……」

ため息と共にCクラスに向かう秀吉。

明「もしもの時の為に他の方法も考えておいた方がいいんじゃないの？」

千「大丈夫ですよ。秀吉君を信じましょう、アキ兄。それに、もしもの時の作戦は出来てます」

雄「……………ブルツ（なんか今、寒気が…………）」

何だろう、千秋の笑顔が怖い。

千「あ、秀吉君がCクラスに入りますよ」

優（秀）『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

？『な、何よアンタ！』

優（秀）『話かけないで！ 豚臭いわ！』

？『アンタ、Ａクラスの木下ね？ ちょっと点数良いからっていい気になってるんじゃないわよ！ 何の用よ！』

優（秀）『私はね、あんなクズで卑怯なことしか出来ないようなヤツとつき合ってる様なヤツがいるクラスが同じ校内にあるなんて我慢ならないの！ 貴女達なんて豚小屋で十分よ！』

？『なつ！ 私が誰とつき合おうが貴女には関係ないでしょう！ しかも言うに事欠いて私達にはＦクラスがお似合いですって！？』

優（秀）『手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は私達の手で貴女達を相應しい教室に送ってあげようかと思うの。丁度試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに薄汚い貴女達を始末してあげるから！』

秀「これで良かったかのう？」

驚くほどの演劇能力を発揮した秀吉がどこかスッキリとした顔で近付いてきた。

優子さんのイメージが全然違ったけど、秀吉がやったんだからきつとあれが素の優子さんなんだろう。でも、やっぱりビックリだ。

雄「ああ。素晴らしい仕事だった」

千「お疲れ様でした」

？『Fクラスなんて相手にしてらんないわ！　Aクラス戦の準備を始めるわよ』

Cクラスから代表の小山さんのヒステリックな叫び声が聞こえてくる。どうやらうまくいったようだ。

……でも、何だろこの罪悪感は。

雄「作戦もうまくいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ」

明「あ、うん」

余計なことを考えている暇はない。後十分で今日の試召戦争が始まる。

僕らは早足でFクラスへと向かった。

秀「ドアと壁をうまく使うんじゃ！　戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ。

あの後、午前九時よりBクラス戦が開始され、僕らは昨日中断されたBクラス前という位置から進軍を開始した。

雄二と千秋からは『敵を教室内に閉じ込めること』と言われ、指示を遂行しようと戦争をしているんだけど、ここで問題があった。姫路さんの様子がおかしい。

千秋も昨日から何か考えこんでたし。

（千秋は作戦のこともあるんだろうけど）

本来指示を出す二人が、今日は一向に指示を出そうとしない。

秀「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！ 補給も念入りに行え！」

そんなわけで今指揮を取っているのは副司令である秀吉。ここまでは雄二の指示通りうまくやれてる。

『左側の出入り口、押し戻されています！』

『古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む！』

左の出入り口にいるのは古典の竹中先生だったか。だとしたらまずい、Bクラスには文系が多いから強力な個人戦力で流れを変えないと一気に突破される可能性がある。

秀「明久よ、そっちを頼む！」

明「わ、わかった！」

秀吉からの指示が来て、僕は古典のフィールドに入る。

明「試獣召喚！」

『Fクラス 吉井 明久

古典 238点』

どうにか雄二達が来るまで持ちこたえないと。

千秋Side

今日はBクラス戦二日目……

昨日根本君が私の予知通り手紙を持って行ったので、前から考えて

いた作戦を実行できます。

瑞希ちゃんと秀吉君、坂本君しか知らないのも他の人には分からないようにしないといけないのでちょっと大変です。

瑞「……千秋ちゃん」

千「大丈夫ですよ、瑞希ちゃん。今は出来なくても、もう少しで坂本君達本隊が来ますから」

瑞「……はい」

不安気な顔で戦場……と言つよりアキ兄を見る瑞希ちゃん。一途だな

作戦開始まで後十分弱。

アキ兄、頑張ってください。

雄二Side

雄「後十分か……」

妹の考えたこの作戦、本当に大丈夫なのか？

俺もアイツに一泡吹かせるのは賛成だが、これは耐性がないときついかもしれんぞ。

雄「まっ、被害が出るのは恐らくBクラスの連中だけだろうがな」

Fクラスからしたら妹の薬の方がよっぽど怖いだろうからな。

雄「おい、君島、五十嵐教員は見つかったか？」

博「ん？ ああ、さっき武藤が見つけて隣の空き教室で待機してもらってる」

雄「ならいい、これで条件は揃った。五十嵐教員を呼べ、Fクラス本隊、出るぞ！」

『『『おおー！！』『』『』』

雄「須川ー！」

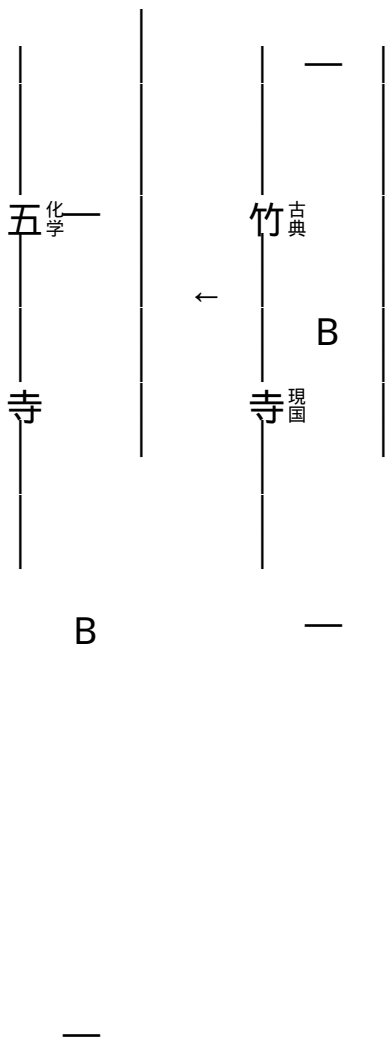
俺は走りながら今し方姿を確認した須川に作戦第二段階の合図を送った。

亮「おう！」

ちなみに作戦はこうだ。

須川が竹中教員に、いざという時の脅迫ネタ〈古典教師編〉を実行する。

竹中教員が居なくなつた場所にこちらで連れてきた五十嵐教員を配置する。



千「五十嵐先生！ 吉井 千秋行きます。試獣召喚！」

瑞「寺井先生、私も行きます！ 試獣召喚！」

『Fクラス 吉井 千秋

化学 578点』

『Fクラス 姫路 瑞希

現在国語 401点』

そして、妹と姫路が召喚し、妹と姫路を根本が手紙で脅す。

千・瑞「うう……」

すると、予想通りこれを好機と見たBクラスの連中が

『『『試獣召喚！』』』

一斉に召喚し、二人に襲いかかる。

千・瑞「いきます！」

だが、あの手紙は妹達の作った偽物。そんな物に効果はない。

二人は思いつきり腕輪を使うことが出来る。しかも、秀吉直伝の演技を戦争開始からずつと行っているんだ、相手は二人に突っ込んでくるだろう。

腕輪が使えればこっちのものだ。Bクラスの連中の半分以上……いや、それ以上を減らすことが出来る。

二人が倒して出来た道を通って明久達準突撃部隊が根本の周りの近衛部隊に勝負を挑む。

後は、Dクラスが室外機を壊したために暑くなった教室を涼しくするために開けた窓から、

ダン、ダンッ！

体育教師を連れたムツツリーニが根本を叩く！

康「……………Fクラス、土屋 康太」

恭「き、キサマ……………！」

康「……………Bクラス根本 恭二に保健体育勝負を申し込む」

恭「ムツツリイニイーツ！」

康「——試獣召喚」

『Fクラス	土屋 康太	V S	Bクラス	根本 恭二
保健体育	4 4 1点	V S	2 0 3点	』

ムツツリーニの保健体育に根本が敵うはずもなく、一撃で勝負が決まる。

こうして、Fクラスの勝利が確定した。

第八問 Bクラスと恋文と女の強さ（後編）（後書き）

作「長らくお待たせしました！ ようやく投稿です！」

千「こんなに待たせて、一体何をやってたんですか？」

作「いや、最近は体育祭に中間、実力テスト、しかも文化祭の準備があつたりで忙しいんですよ」

千「ただ、点数が悪くて英語の小テストが追試になったりしてたような……」

作「ドキッ！」

千「確か今週でしたよね？」

作「うわーん、英語なんて嫌いだ（涙）」

作者が退場しました。

千「仕方ないですね。では、次回「戦後対談と襲い来る〇〇」お楽しみに？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5837u/>

僕と夢見と召喚獣

2011年11月15日11時27分発行